

ひとくろースタッフ 起業家さんら群像

◇25◇

鳥根県八雲村に本社を置く小松電機産業は、自動開閉する高速シートシャッターと集落排水の水処理システムを主力とするメーカー。ベンチャー企業の旗手的存在となっている。小松昭夫社長(五〇)が弟の光雄専務(五〇)とポンプ修理業から創業して二十三年。今や社員八十五人で年間三十八億五千万円(平成七年度)を売り上げる。成長の大きな原動力となったのが昭和六十年製品化したシートシャッター。市場のパイオニアとしてニュービジネス賞を受けるなど社名を全国に広めた。遊ぶ設備を活用

シートシャッターは、それまで主力にしていた配電



△上▽

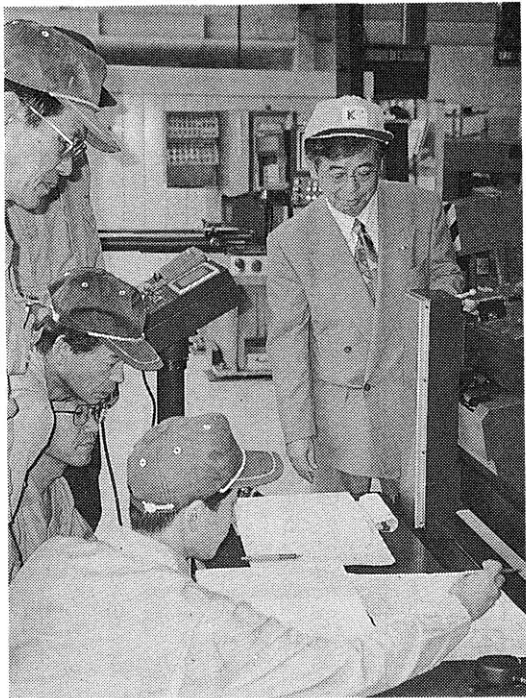
自動開閉シャッター

小松電機産業 小松 昭夫社長 (八雲)

盤の仕事をやむなくやめたため、切羽詰まって商品化したというのが正直なところです。会社をつくって十年たち、配電盤の仕事に加え上水道の流量などを測る「水道計装」も手掛けるようになっていました。コンピュータの制御機能を備

会社成長の大きな力に

えた水道計装はそれまで大手の分野でしたが、市場をどんどん開拓していきまし。計装は元請け、配電盤だけは下請けという構図の中で両方の仕事をしようというのですから業界内での風当たりは強かったですよ。そうするうちに配電盤の仕事がこたえなくなり始め、将来に不安を持った社員が一度に十人も辞めました。昭



シートシャッターの製造設備の増強策について、担当者らと話し合う小松昭夫社長(右奥)二鳥根県八雲村、小松電機産業本社工場

和六十年、社員が三十五人の時です。当時の年商四億五千万円のうち配電盤関連に占める割合は五割を占めていた。不安を持つなどいっても無理な話かもし設備を遊ばせておくわけにできません。小松電機は倒産するといいうわさも立ちまがシートシャッターだったのです。

そこで「配電盤はキッパリとやめ、水道計装に力を傾注していこう」という2カ月で量産態勢工場出入り口に取付けるシートシャッター体制も整っていない

東出雲町)から開発依頼を受け、昭和五十五年から製造。工場内の防寒対策用として昭和六十年までの五年間で三菱の関連企業を中心に三十台ほど販売していた。

めオーダーメイド方式をとっていましたが、いざ量産化しようと思つたに早く立ち上げ、二カ月で生産態勢を整えました。でも、売出すまではそんなに大きな期待はかけませんでした。あくまで水道計装が主で、シャッターは従と思っていたのです。しかし、発売してみるといろいろな業界から注文が入る。防塵(じん)、防虫対策、冷房工場の断熱効果も購入先から知らされまし

新幹線でひらめく せっかく好スタートを切った新製品。故障調査を済ませ、横浜から乗った新幹線の中で「どうしたら良いんだ」と考えるうち、折り畳み式から巻き取り式に変えてみてはとひらめきました。シャッターに入っている鉄パイプの芯(しん)を塩化ビニールの下水パイプに替えたら巻き取れるのではないかと考えたのです。泥の中で使っていたパイプを頭上で回す。水道の仕事が役立ちました。すぐに電車の中から会社に電話をかけ「塩化パイプをシートにつけ、うまく巻き取れるか実験してほしい」と指示しました。八雲村に帰ると、既に模範は出来上がっていました。「社長、長いけそうぞうです」という担当者の弾んだ声に「よし」破れる。三万回の開閉を寿命と考えていたのですが、それでは印刷業者などは半年ともたなかったのです。(聞き手は本社経済部・金丸晃記者)